

現代短歌分類辭典

第百三卷

津 端 亨 編 纂

津 端 亨 編 纂

現代短歌分類辞典

第百三卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辞典

103

昭和五十九年六月一日発行 定価二、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端

亨

〒111

東京都台東区鳥越一―十一―八

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表者 津 端

亨

振替 東京 三―九三一―四

電話 ○三―八五一―九八六九

目

次 (第一〇三卷)

歌数	頁数	歌数	頁数
いまに	一四六	いまーのーかぎり	二
いまにーいまに	一	いまーのーきせつ	一
いまにーか	三	いまーのーただいま	二
いまーにーかも	二	いまーのーこ	一
いまーにーこそ	一	いまーのーさき	二
いまーにーし	八	いまーのーとき	一三
いまーにーして	一八五	いまーのーときよ	五
いまーにーぞ	一	いまーのーは	一
いまにも	八	いまーのーばあひ	一
いまーぬ	一	いまーのーひ	三
いまーの	三九七	いまーのーほど	一
いまーのーいま	一六	いまーのーま	八
いまーのーうつ	七九	いまーのーみかど	一
今の浦	一	いまーのーむかし	一

いままゐり
 いまーまで
 いまーまごーに
 いまーまでーの
 いまーまでーは
 今宮

一 二 三 四 五 八

三〇五
 三〇五
 三〇七
 三〇七
 三〇八
 三〇九

いまーむかし
 今村寛
 いまめかーぬ
 いまめきーて
 いまめく
 いまーも

一 一 一 一 一 六〇五

三〇九
 三〇九
 三二〇
 三二〇
 三二〇
 三二〇

合計 四、二二〇首

いまに【副詞】

①（下に打消の表現を伴ふこと多し）過去から今に到るまで。今になつてもなを。
 いまだに。②近い未來に關して決意や推量を述べる。近いうちに。きつと。その
 内に。やがて。

知りあひし初めに今におぼろにて君が青春につひに触れ得ず⑤

植松 寿樹

退きて守れるものは悉く亡び去りける今にあらずやも⑬

窪田 空穂

シルレルの死にゆきし部屋もわれは見つ寂しきものを今につたふる④

斎藤 茂吉

じわじわと首しめられてゐる今に反撥せずして何をせよとや②

斎藤 喜博

親切にすぎては人に好まれぬ妻今に賢くなることもなく③

村野 次郎

神話時代今にもたらし人類をほろぼす死の灰降らしにふらす②⑩

窪田 空穂

鉏鋤すくはに鞆ゆきとりそへて献まづらしし御世のかしこさいまにしぬぶも⑫

安江 不空

過ぎし日を今に返さんすべなしとむなしき歎き今日もするか④（現代短歌集）

渡辺 順三

過ぎし日を今に泣けとか野火焼きて焦げし芝生に咲く木瓜の花①

若林 牧春

いまに

いまに

すべりひゆ冬に蓄ふあはれさも今につづかむ雪ふかき村①

皇神の天津齋種ゆだねを播かしけむためしをいまに早苗植ゑます⑩⑪

駿河びと連歌師宗長そうちやうここにして棲みし世遠く今に残る寺⑫

生活の中より生み出す民族の芸術は根づよし古代より今に②

先生に初めてまみえかしこみしその日の思ひ今に忘れず②

善竹橋そのままいまにのこりをり水の流れとともに年経て

そのアツシが着物さへ今に着ることなく熊狩りの矢も自然錆びてゆくばかり⑤

大堂の真闇にとりゆらぎたる不断の灯は昔より今に（新萬葉集四）

大陸に無碍むげに死にたる兵つばものら英米の敵性をいまにゆるさず⑥

刀創を今にとどむる木乃伊なり藤原四代泰衡の首③

戦にはやく死にたるかなしみに堪へ来て今に国は敗れし⑪

たはやすく柏が峠越ゆべしや安元あんげんのあらし今にさむかり①

松本 常太郎

安江 不空

窪田 空穂

渡辺 信子

塚田 菁紀

細井 魚袋

矢代 東村

佐渡 淳一郎

吉植 庄亮

佐野 四郎

松村 英一

金子 元臣

血のつながりなき孫君の育てつつ親しみしやと今に疑ふ⑮

長期には堪へえぬ民と米英らわれ軽しめき堪へ来て今に⑯

誰も彼も氣に入らぬとき夜半に起きて仕事してをり今に見てゐよ

端然と電灯のもとに君坐り照りし額をいまに忘れず②

月花のあそびは既になくなりし今にむかしの園をつちかふ（朝雲）

徴税の役人をおそれたりしこと民謡となりていまに伝はる④

つたへきく往古辺土の防人の誓をいまに遠く征きにし（支那事変統後）

培ふを罪惡として蒙古人毛物とともにいまに移ろふ④

天子のみここにのほりし階きざはしのましろ大理石いまに清けし④

天竺の恒河の紅き花はちす仏の世よりいまにかなしき

天平の昔のままに位置占めて今にしづけき巨き寂び石⑧

天平や花ちりがたのゆふのらにかすむあらざいまにして見つ⑧

いまに

松村英一

窪田空穂

尾崎孝子

神原克重

岡　　麓

相良義重

峯村英薫

吉植庄亮

吉植庄亮

北原白秋

若林牧春

安江不空

いまに

銅鐸の面に残す農事図にこもる願の今になまなまし④（現代短歌大系）	谷
時ありてゆかばわが寄らむ樂しみの空 むな しきいまに君を惜しむかも①	塚田菁紀
時頼公の開きし寺は今に榮えて選物場内に満ちたり僧侶	今井妙性
どくだみはどくだみみつばはみつばなるこの道理 ことわり の今にあたらし④	館山一子
十年まりすぎにし今に身に深き悲しみをわが堪へて答へし③	村田利明
遠き代の畏き人が浴みし湯の継ぎて湧きつつ今にゆたけき	窪田空穂
遠き世の光を今に放ちゐる星空のもと吾がうれひ消ゆ	水谷孝子
乏しきを歎かずいまにともどもに來にける者を愛しと思ふ③	鹿児島寿藏
とほつおやの植ゑしままなるわがやどの松なほいまにさかえけるかな①	昭憲皇太后
遠つ親もてる心の伝はりてわれに覺めたる今にあらぬか⑬	窪田空穂
遠つ世も見つつ歎きし明日香川今に流れて清き瀬をなす⑤	村野次郎
遠つ世ゆ今に絶えせぬ火のけむりかしこしとしぬうべ島人ら①	塚田菁紀

富み難き世にやすやすと富むものを昔より今に賢しとする⑤

内鎌ないがまの野川のほとりに咲きてありし瑠璃草のむらさき今に目に見ゆ⑥

長崎の人等もなべてクロス山と名づけていまに見つつ経たりき③

亡き子には吾は必ずしもよき父にあらざりけらし今に思へば⑤

なにか一つやらうとする気持。この気持を今にすてきれずひそかに思ふ。⑤

何ゆゑの戦なりしと今になりて甲斐なき声を吾は立てざらむ②

なほ今に師を在あすと思へ書きて賜びし歌の数々眼にあざやけし①

大理石を白雪はくせうのごとくたみたる天子のおごりいまにゆたけし④

二十年の昔を今に君達の純情にしてわれ老いざらむ⑧

二十余年の薰陶うけし我れなるに愚や煩惱に流転す今に

二千年国の歩みを担ひきて今につたへしこの小さき文字①

二千年つたへて今にみ光りのいよさやけく日々にあらたに⑨

いまに

西田 嵐 翠

鹿兒島 やすほ

斎藤 茂 吉

半田 良 平

矢代 東 村

山本 友 一

荒木 暢 夫

吉植 庄 亮

若林 牧 春

宇都野 竜 一

太田 青 丘

太田 水 穂

いまに

日々をものに追はるる心地のみ続け続ける昔より今に⑧

新むめの祭たふとし千早ふる神代の手ぶり今にのこりて

女帝の手すさびなりし刺繡布伝へつたへて今に見しむる

人間の相憎しみし戦ひの今にのこせる廢墟かこれは

ネフリュードフのことを語れば母も知れり今に世界中の人が語らむ⑤

練り鍛へ兵等猛く敏しいまに下る動員令を待つばかりなり①

念仏の大きな聖をうけ継ぎて法燈高く今にかがやく③

野のはての樹に縛られた千年のうらみはいまにきつと報いる③

排仏棄釈の時季を経て来て大徳寺法統連綿と今に続けり①

白墨らわれを誇らく四十年つとめていまに教壇に立つ①

柱のきずけんくわした時つけたきず今に思へばなつかしくなる（兒童萬葉集）

涯しなき野をゆくならむ桐の葉を今に落せし風のさまみゆ①

尾山 篤二郎

黒田 清綱

遠山 光栄

村野 次郎

岡野 直七郎

美禰 国樹

清水 乙女

前川 佐美旭

今井 妙性

金子 元臣

岩橋 妙子

桐田 路村

垂鼻のながながし鼻にしわよせて伎楽の面のいまに世を笑ふ⑪

母の手に育ちし我は貧しくも笑ひを持ちき今に及べり①

秀吉の情こめし文字ゆたかにも風流心をいまに伝へつ⑧

秀頼が五歳のときに書きし文字いまに残りてわれも崇む③

一つ咲きて愛でし水色の朝顔はあまた咲く今になりても飽かず⑤

ひとつ部落と此処にこもりて古き代のなごりの言語いまにとどめし⑪

人の世の難きを今に思はする宝亀四年の借用証あはれ（現代短歌大系）

人の世を遠く離るる願ひにて建てけん寺か今にひそけし③

日の本の常稚国の血の脈をいまに伝へて仕へまつらふ（のぼり路）

弱細の手弱腕に纏き着せし古代の被衣いまに伝へり⑤

ひむがしに日月は入らず然れこそ今に子のゆゑ親は迷へれ①

深く入る田居の広きを吾は見つここに植ゑて栄ゆ今に小原は

いまに

吉植庄亮

松井如流

高田浪吉

斎藤茂吉

半田良平

斎藤茂吉

服部嘉香

村野次郎

斎藤茂吉

尾山篤二郎

金子元臣

土屋文明

いまに

藤色が似合ひ給ひし先生のまろき背中のいまに恋しき①

太縄もて結へる木材竹材の黒き艶沈^{つや}む二百年を今に③

父母あらぬ吾をあはれみ時々^{あきさ}に賜びたる錢かわが思ふ今に②

冬いまに居つく秋沙鴨^{あきさ}か波切の洲渚^{うづす}の渾に数寄る見れば⑦（現代短歌大系）

旧き権威亡び行くととき今に学び君ら思想の陰惨を知らず②

古き蟬今に帰りに鳴く如し祖父母も父母も皆死にましぬ

故郷の焼山なだれうどの芽を摘みし幼さいまに匂へり①

碧眼奴をここに斬り捨て海江田信義奈良原茂の名は今に伝はる⑦

奉天の大包圍戦の莊嚴を現のいまによみがへらしむ⑧

梢消えし囲炉裏に寄りて彼の越^このひじりを今に君ぞおはせる③

ほととぎす今になくらん山かけの庭は若葉のいろになりぬる②

寝ぬたまひし一つの句今に記憶してその日に見えたるままなりし③

市川敦子	植松寿樹	田谷鋭	北原白秋	近藤芳美	林圭子	桐田露村	松田常憲	斎藤茂吉	吉野秀雄	樋口一葉	村田利明
------	------	-----	------	------	-----	------	------	------	------	------	------

貧しかりし母がつくりし菜の雑煮その淡白は今に恋ほしも③
 松葉かく音にめざめし真昼すぎまちにし人は今に來らず①
 松本にてわが児の乳を養ひし山羊の毛皮をいまに保てり③
 伏はぬ者を退ひて平和したまひ言向けましし天が下今に⑨
 窓白くなれば起きいづるならはしを今につづけて母すこやかに②
 まへ溪に洗ひ置く襯衣を鵲鴿がふみて遊びし今に恋ほしき①
 まんだらげの煙こもらふ一ときを我が王国と今にかなしむ②
 右の部落に或日日の丸の旗を見しがあはれあはれ今に消息を聞かず①
 三つ峠亡き妻と登り富士を見て今に美しく其後は行かず①
 水屋一つにそれぞれ好みの茶屋づくりその心ばへ限りなし今に②
 耳学問なりと軽んじ居しも今に思へば悔り難き功績を残しき⑤
 宮裏はそこらの砂の日に蒸れて土糞のにほひいまにをさなき⑦
 いまに

清水乙女	松田常憲	土屋文明	尾山篤二郎	相良義重	加納小郭家	高安国世	美禰国樹	立花馨	中河幹子	金子不泣	北原白秋
------	------	------	-------	------	-------	------	------	-----	------	------	------

いまに

宮田修知りてより今に四十年信じつくせりその魂を⑮

宮戸座の看板のまへにたたずみし昔を今になすよしもがな

むかし者には昔の物がよくきくと正露丸などいまに用ふる（芙蓉忌）

むつくりといまに起きあがり吾れを見て声かけたまふごとき心地す②

無敵艦隊と今に豪語せる英水軍を忽ちにして葬る日来る⑨

明治の末初めてまみえ今になほ絶えぬえにしを思はざらめや②

明治より今につづきて八十年葯房先生とこ若にます③

目の見えぬ母が縫ひためて賜ひたる雑巾ひと重ね今に仕舞ひおく①

眼を病める相模が簞り詠みし歌今に残れり日向薬師に②

物忌の卜問しげき世の中を今に比べて羨しきろかも⑩

もののふのむかしを今にしにのぶらむ引馬の野辺にくつわ蟲なく

焼枯の老槻の幹いまになりておのづから皮のむけて落つなり（光化門）

窪田 空穂

吉井 勇

相良 義重

上田 英夫

尾山 篤二郎

矢部 道氣

中沢 庭柯

鹿児島 やすほ

遠野 左田子

尾山 篤二郎

落合 直文

植松 寿樹

柳橋の妓の風俗も凡ならぬむかしを今になすよしもがな⑦

山家集 昔を今に歌はただ本性を遂ぐるためのみにあり②⑤

山寺のむかしを今に櫃の裏を日ごとに炒りてまゐらせにけり（小笹生）

山畑に十株ばかりの桑たちていまに養蚕の技を遺せり③

破れやすき素焼の如き心よと見つめし眼さへ今に忘れず③

夕冷ゆる溪川の湯気におどろけけど其の湯口今に人に知らえず③

よき靴の足に温きも今に知り貧しくわれの一生^{ひとよ}すぎゆく④

義仲が汲みし矢立の水絶えず今に湧きつぎ澄み湛へたる②

吉野大夫のしかばねの灰くらひたる紹益のところ今にのこるや④

世繁りは今にはげしくあら谷の焼き拓かれし秋蕎麦の花①

夜業してふた夜ねむらず恙なきからだとほこる今にはあらず

世の移り激しき今に苦しむと栄^{さか}ゆく友とありて身にしむ

いまに

吉井 勇

土岐 善麿

岡 麓

相良 義重

柳原 白蓮

森山 汀川

田谷 鋭

矢部 道氣

高橋 希人

金子 信三郎

山口 好

松村 英一